

ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(17)

中村周平

2011年3月に立命館大学大学院応用人間科学研究科を修了してからというもの、この対人援助学マガジンで自身の経験を発信する機会をいただいていたのですが、自ら動く、発信するという点では、ほど遠いものがありました。

卒業後の進路に私が選んだのは、知人が立ち上げたNPO法人で働くというものでした。後期課程に進む方を除けば、院生であっても就職活動の波から逃れる？ことはおそらく困難でしょう。とくに、修士論文と同時並行で進む院生の就職活動は、論文作成と就職活動の板挟みとなり、身体的・精神的に苦しめられることとなります。事実、同期の方々の大変な日々を目の当たりにしてきました。そして、私の「就活」といえばそれは散々たるものでした。一回生の12月にやってきた就職活動の波に乗ってしまった私は、「どこでもいいから就職ができれば…」という気持ちばかりが先走っていました。その根底には、自分にできることが限られている現実と、その限られた中でも精一杯頑張れば何かに繋がるのではないかという身勝手な希望の裏腹な二つの思いが重なり合っていました。ただ、それは同時に「働くこと」に対して正面から向き合えていない自分がいたことを露呈することにもなったのです。

当時、少しでも就職活動の武器になるのではと思う学内のPC講座に通い、障害のある学生の就職相談に乗っていただけたところにも足を運びました。

それは決して無駄ではなかったと思いますが、今、振り返れば「自分」というものを持たずに、ただただやみくもに動き回っていただけだったのではと思います。ある会社で就職相談に乗っていただいた時のことです。数回のメールを経て面談の機会を設けていただき、そこで自分のできることを精一杯アピールしました…いや、自分ではしている「つもり」でした。企業における「障害者枠」といわれる採用枠の多くは、出勤時間や配属における配慮はあったとしても、仕事は他の社員と何も変わりません。少しPCが扱えたとしても、移動や何か作業を行うにあたって何かしらの支援が不可欠な私にとって、それはあまりに遠すぎる話でした。しかし、当時の私は将来における漠然とした不安や焦りから、その遠さがまったく見えていませんでした。「相談に乗ってもらうことで何か道が開けるんじゃないか…」、そんな甘すぎる私の気持ちは面談担当者の方に見透かされていました。「あなたはここに何しに来たんですか？何かを期待して来られたんでしょうか？」、その言葉は非常にショックなものでしたが、それ以上に働くということに対する自分の浅はかな考えを心底恥ずかしく思ったことを鮮明に憶えています。

この面談担当者の方にそう言っただけのことを、今では本当に感謝しています。中途半端なスキルや覚悟では、仕事上において相手の方が満足してもらえるものを提供することは困難です。できるこ

とが限られている私にとってはより厳しい現状があることは明らかでした。「自分は『働く』ってことにちゃんと向き合ってなかったんじゃないか」、「自分の強みを最大限活かす、それを考えていくこと大事なんじゃないか」。面談担当者の方の言葉は就職活動さえしていれば、という私の甘えを見事にふっ飛ばしてくれました。そして、自分のできることだけで働き方を考えるのではなく、「自分のやりたいこと」から考えや方向性を広げていくことの大切さに気づかせてもらうきっかけとなりました。

また、偶然にも同時期に修士論文を作成していたこともあり、その際「なぜ、自分は大学に来たのか?」、「どうして福祉を志そうと思ったのか?」、祖母の死をルーツとする私の福祉を志すきっかけとなったエピソードを思い返すことができました。それは、これからの自分の方向性を決めるうえでの大きな原動力となってくれたのです。「自分が学びたいと思った福祉の分野で、もう一度働くことについて考えてみたい」。社会福祉士資格を得るうえでの実習や大学で私が取り組んできたことを振り返り、自分の進路を模索していきました。「自分自身を最大限に活かせることって何なのか。自分のやりたいことって…」。心に浮かんできたのは、一度は修士論文のテーマとして考えていた「障害学生支援」でした。学部時代を含め、私の大学生活を考えるうえで無くてはならないものでした。また、自分自身が大学生活を送っていく中で何度も課題とぶつかり、その可能性に助けられました。そして、何より障害学生支援を通して、たくさんの仲間と出会い、大学で様々なことを経験することができました。自分の大学生活を振り返り、これなんじゃないかという気持ちが溢れてきました。そして、最終的に大学の先輩と後輩にあたる方々が立ち上げた「障害学生支援」を理念に掲げる NPO 法人でお世話になることを決めました。私の「就活」は文字通り散々なものだったと思いますし、就職活動を経て仕事をされている方々には本当に申し訳ないくらいのものでした。ただ、就職活動を経て感じる事ができた気づきと、修士論文作成における気づき…この双方の気づきも、私の大学生活において何ものにも代えがたいものとなりました。



かなり脱線してしまったので、話を本筋に…。4月からの新生活は、文字通り多忙を極めました。新しい仕事やそれに伴う生活の変化、新たな方々との出会いなど、これまで経験したことがドドドッと押し寄せてきました。新しいことを始められた喜びと同時に、失敗が許されないことへのプレッシャーから体調を崩すことも度々。ある企画の前日は、緊張から一睡もできないということもありました。そのような生活を送っていた私は、修士論文で懸命に打ち込んだスポーツ事故に関することについて何一つ手を付けることができていませんでした。

調停の際にお世話になった弁護士の方に、大学の講義などで自身のスポーツ事故について話をさせていただける機会を度々いただいていた。大学院修了後も、ありがたいことにその機会をいただきながら、仕事に時間を取られていることを自分への言い訳にして内容について大きく進歩させることができませんでした。何より、仕事一辺倒になっている私の様子を気にかけておられました。「これからどうするんや、研究は続けていくんか?」。いけないと思いつつながらズルズル答えを出さないままにしていた、ずるい自分を再認識する言葉でした。研究と研究の間の時間が開けば開くほど、内容は過去の振り返りばかりになりモチベーションも下がってしまう…事実、そうなりかけていた私は自分を奮い立たせるため、弁護士の方にあるお願いをすることにしました。そのことが、自分の新たなステージに成長するための最初の一步となりました。